

仲 真紀子（立命館大学総合心理学部教授）

○仲 きょうは日曜日ですにお集まりくださいますて、
どうもありがとうございます。また、松原先生、企画し
てくださいますて、本当にありがとうございます。



1. はじめに

「女性研究者とワーク・ライフ・バランス」ということ
で、副題として「デュアルな生活」、二重の生活というようなことを書きまし
たけれども、こんな形で1時間お話しさせていただきたいと思います。

内容としましては、研究生活の始まりから今までの道のりを紹介しながら、
メインのこととしてお話ししたいことは、2つの世界を持っているのはいいこ
とだ、ということです。研究者と家庭人とか、研究の中でもこっちの分野と
あっちの分野というように、二股をかけることのおもしろさ、楽しさみたいな
ものが伝わるといいかなと思っています。時々には勇気が必要なわけですし、あ
あ、ここは勇気出すところだとか、頑張るところだと思ふこともあるわけなん
ですけれども——皆様方も、何かちょっと辛かったり、大変だなと思われたと
きには、あ、ここだ、ここが重要な時なんだ、というふうに思われるといいか
もしれません——そんなこともお話しします。研究者、研究員の皆様だけではなくて、
日々の生活の中での日常研究者、未来の研究者も含めてエールを送られ
ればいいな、と思っています。

経歴ですが、私は福岡で生まれて、親戚も福岡にいますけれども、父が仕事
で千葉に越してきました、千葉、それから東京、学生結婚をして、筑波に住ん
でいたこともあります。また東京に戻り、それから14年間、この3月まで北
海道におりまして、今は大阪、ということになります。

高校時代に留学する機会がありまして、Carle Place High Schoolという高
校を卒業したことは、自分の中ではちょっと大きなことでした。その後、都立
高校を卒業、お茶の水女子大学に入って心理学を専攻し、修士課程の24歳の

ときに結婚しました。その後、博士課程へと進み、助手になった1984年、29歳のときに子どもを授かりました。その後、千葉大学の講師になり、助教授になり、当時はまだ学位論文を書く人は余りいない時代でした、1987年、千葉大学に就職した年ようやく学位を取りました。助手時代の3年間で学位論文を書いたということになります。1988年、千葉大学で助教授となり、その後、35歳のときに1年間、アメリカでの在外研究に出していただきました。子どもは双子だったので、双子と私の3人で行きました。その後、千葉大学から東京都立大学に移ったのが44歳のとき。この時点で子どもたちは高校でしたが、ばたばたしているお母さんと住むのは大変だと思ったのか、ニュージーランドに留学。このとき、ちょうど犬を飼っていたんですけども、犬も連れて行くということで、犬の留学(笑)といいますが、犬の渡航が一番大変で、2人プラス1匹でニュージーランドに行って3年間過ごしてくるようになりました。その後、子どもたちは帰ってきましたが、彼らも大学に行くということだったので、少し遠くてもよいかと、2003年、私は北海道大学に移りました。14年北海道大学におりまして、この4月から立命館大学でお世話になっています。

夫はといいますと、企業から短期大学に移った後、福岡にできた新学部に行くチャンスをいただいた。ということで、福岡に移りました。です。97年だったか98年だったか、以降はずっと、どっちも単身赴任みたいな形で暮らしています。ということで、いろいろな側面でデュアルなことになっていくわけです。

2. 学生時代と結婚

私は、いわゆる鉄腕アトム時代ですので、お茶の水博士のような科学者に憧れていました。父親が建築士でしたので、初めは建築学とか美学とか、そのあたりを専攻したいと思っていたんですが、いざお茶大の美学に入りましたら、実際はそうではなかったのだと思いますが、私には文献研究の印象が強かった。本を読むよりも歩き回るほうが好き、というふうなことがありまして、一般教養で受講した心理学に惹かれ——心理学ですと調査に行くとか、実験室で実験をするとか、とったデータを分析するとか、身体を動かすことが多いんですね——、学部2年で心理学に移ったということがあります。

学部頃の頃

1979年、学部時代ですけれども、卒業論文でこんなことをやりました。例えば、「だから」や「だけど」の意味。辞書を引きますと、順接とか逆接の接続詞と書いてあるわけですが、そもそも何が順接なのか、何が逆接なのかわからない、そんなことを思ひまして、こういうことをやりました。

例えば、「夏は暑い。だから——」の後、人はどんなことを書くのか。「冬は寒い。だけど——」の後、どんなことを書くのか。小学校2年生、4年生、6年生、中学生、大学生を対象に調査をしてみますと、いろいろな反応が出てきます。例えば、「夏は暑い。だから暑くなければ夏ではない」「夏は暑い。8月4日は夏だ。だから8月4日も暑いみたい」といった論理的なことを書かれる方もあるし、「夏は暑い。だから半袖を着る」などの経験論的な推論、「夏は暑い。だから嫌いだ」とか、逆に「だから好き」とか。おもしろいのは、「夏は暑い。だから——」の後に、「冬は寒い」というような、対比的なことを書かれる方もあったりするわけです。こういった反応には年齢差があり、やがては収束していくのですが、目に見えない言葉、文脈で学ぶしかないような言葉の意味の習得過程は面白い、と思いました。

「だけど」についても同じように調査しました。「冬は寒い。だけど——」の後を書いてもらうと、「だけど、寒くない冬もある」「だけど、花が咲くとか」

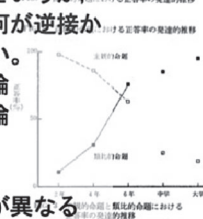
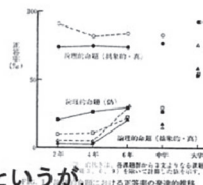
1979 学部時代

- 夏は暑い。だから～
 - ≫ 暑くなければ夏ではない。
 - ≫ (8月4日は夏だ) 8月4日も暑い。
 - ≫ 半袖を着る。
 - ≫ 嫌いだ/好きだ。
 - ≫ 冬は寒い。
- 冬は寒い。だけど～
 - ≫ 寒くない冬もある。
 - ≫ 花が咲く。
 - ≫ 好きだ/嫌いだ。
 - ≫ 夏は暑い。

順接、逆接というが、何が順接で何が逆接かはわからない。

- 論理的推論
- 経験的推論
- 主観評価
- 対比概念

発達の機序が異なる



仲, 1983; 1988

のような予測に反する例外を書く方もいれば、「だけど、好きだ」「だけど、嫌いだ」などの評価、「冬は寒い。だけど、夏は暑い」のような対比を書かれる方もいます。これらの調査を経て、論理的な推論、経験的な推論、主観的な評価、対比など、順接、逆接はいろいろな概念を包含しているんだな、ということがわかって、ここでどっぴりと、データ分析の面白さに魅了されました。

この頃、大変よかったこととして、旦那（夫）と出会えた、ということがあります。私は多動でじっとしてられない性格です。休みを見つけては一人旅。当時いっぱいあったユースホテルなどをめぐって、旅行し回っていたんですけども、松江のユースで将来の夫と出会いました。私はそのとき学部3年生の終わりかな。彼は学部1年生の終わりだったんですけど、何か意気投合して、その後、2年ぐらいたって結婚しました。何を隠そう、夫は松原先生の同窓生であったりもしまして、ご縁を感じる今日この頃です。

学部3年の春休みに出会い、修士1年の春休みに結婚したんですね。母親ともけんかばかりしていて、妹とも張り合ったりしていて、家族関係にも難しいことがあるし、いろいろ人間的な葛藤もあった中で、夫という一応、一つのベースを見つけることができたのは、人生の中で、私にとってはとっても大事なことでした。ありがたく思っているところです。

修士・博士課程

修士時代はいろんな面でなかなか厳しい。みな就職して9時～5時で仕事をして、お金も稼いで、ちゃんとやっている。一方私は、研究は面白いとはいえ、お金にもならない、こんなことをやっていて役に立つのかみたいなことを、日々やっている。そこに楽しさを見出すことにも罪悪感を感じます。おてんとうさまの下、顔を上げては歩けないと思って、毎日下を向いて歩いたりしていました。修士時代は悶々として苦しいところもあったんですね。でも、博士課程に上がったときにはそこが吹っ切れて、もういいや、私は研究者になるんだと思うことにしました。認知的な変換、心理学的に言えばそういうことになると思うんですけども、博士課程になったら、もう自分は研究者のたまごだと、勝手に決めてしまったんですね。奨学金があるわけでもない、研究でいい成果が得られたわけでもないんですけども、もう決めた、ということにし

まして、たまごになった。たまごになったからには、——夫のいる筑波大学に世帯寮というのがありまして、そこに住んでいたんですけども——、そこを仲ラボということにしまして、今考えると倫理的にどうなんだ、という感じですけども、筑波大の宿舎のドアをノックしては「今心理学の実験をやっているんですけど協力してもらえませんか」とかと言って、学生さんに仲ラボに来てもらって実験の参加者になっていただいたりしました。そうやって、論文を書いたりしていました。

一方で、「バイトをやめさせられた」というエピソードもあります。好きなことはできるんだけど、そうでないことが、できない。お金も少し稼がなくちゃと思って、小さな塾の先生というのをさせてもらっていたんですが、足が進まないんですね。それで、遅刻したり、本当によくないんですけども、今日はちょっと具合が悪くて行けません、みたいなのが何回か続いたところ、「仲さん、あなたもう来なくていいから」と言われてやめさせられてしまったということがあります。ああ、仕事は責任を持ってやらないといけなんだなということと、できないことはやっぱりできないんだよね、という自分の中の限界といいますか、そこを悟ったという感じもありました。

そのころからコンピューターがだんだん使われるようになってきて、Apple IIという、今のMacの元祖みたいなパソコンが出てきた。それはメモリーが24KB。今は何ギガ、何テラとかいうのに、それは24KBなのに値段は83万円という、すごいコンピューターだったわけです。でも、どうしてもそれが欲しいわけなんですね、実験をするために。そこで親戚中に声をかけて、一口2万円とか言ってお金を集めて、あと、奨学金をいただけたので、そのときに入ってくるまとまったお金を加えて、そのパソコンを買ったというのがあります。スライドに写しましたのは、最後の、片づけている最中のApple IIなんですけど、この機械に助けられて学位論文まで書けた、と思っています。

研究におけるデュアルな世界

「だから」とか「だけど」とか、自然言語を分析するのにちょっと疲れて、修士のころは、別の世界に行ってみたいということで、反応時間を測るようなことをやっていました。例えば「はもん」という言葉は、水面の「波紋」にも

なるし、道場を「破門」するという「破門」にもなります。「水面」という語の後に「はもん」、「道場」という語の後に「はもん」と出すと、「はもん」が異なった意味で解釈される、ということがあるんですね。この多義性の解決がどのように行われるのかを知りたくて、「水面」—「はもん」、「道場」—「はもん」などの単語のペアを短い時間、Apple IIで提示して、反応時間を測定するというのをやりました。そのときに、「水面」の直後に「はもん」を出すとか、「水面」の後0.6秒とか、1.2秒たってから「はもん」を出すとか、「はもん」を出した後に「水面」を出すとか、2つの語の間隔を変化させます。「水面」のような語が提示されると、その語の意味が活性化されるわけなのですが、そのタイムコース（時間軸に沿った活性量の変化）と「はもん」の解釈の関係性を調べたりしていました。言葉をひたすら分類する「だから」「だけど」研究とは異なり、これはデュアルな別の世界での研究ということになります。

修士・博士のころ Dualな研究

● 意味の多義性処理における文脈の効果 仲, 1985, 1986

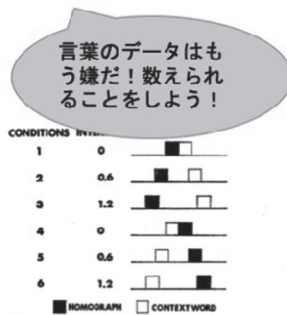
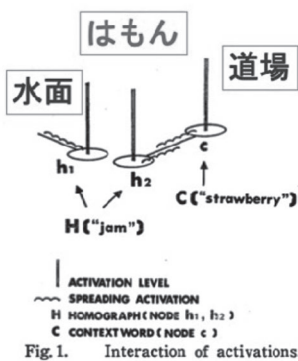
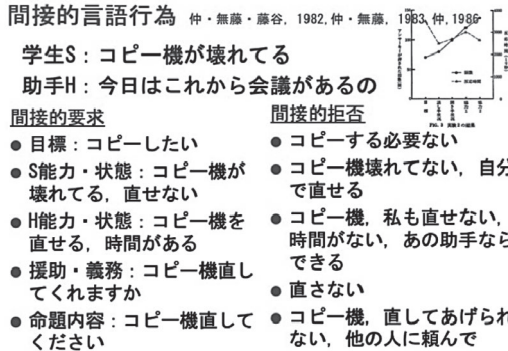


Fig. 2. Presentation intervals between homographs and context words (left ones are presented first).

こんなふうにして、少しカチッとした研究をしていると、また自然言語が懐かしくなるわけです。そこで、今度は間接的な言語行為の研究をしました。例えば、大学で助手さんに、「コピー機が壊れているんですけど」と言ったところ、助手さんが「これから会議があるのよね」と言われるので、「わかりましたー」と言って戻ってくる、というようなことがあるわけです。この会話、よ

く考えてみると意味不明といいますか、「コピー機が壊れている」とコピー機のことを言っているのに、助手さんは、「これから会議があります」と言っている。コピー機と会議にどんな関係があるのか、ということになるわけですが、日常会話では、「これから会議がある」と言われれば、今は直してもらえないんだな、ということが伝わったりするわけです。「壊れている」と言いながら「直してほしい」と伝え、「これから会議がある」と言って、「今はだめなのよ」と伝える。間接的な要求、間接的な拒否というんですが、こういうことがどうして可能なのかということ、複数の研究で調べました。

わかったことは、例えば要求をするためには、その目標、「コピーをしたい」とか、今の状態、「コピーできない」とか、本人の能力、「直せない」というようなことが前提となる。一方、相手方、今の例でいうと、助手さんには、コピー機を直す能力があるとか、直す時間があるという状況や、「直してくれる」という協力的な態度が仮定されているわけです。「コピー機を直せ／直してください」と命令形でお願いすると「いやだ」「だめです」という回答しかできなくなって、場合によっては人間関係に問題が生じます。ですので、間接的に、質問文のかたちで「コピー機直してくれますか」と尋ねたり、陳述文で伝えたりするわけです。例えば、目標「コピーしたいんですけど」や能力「コピーできないんですけど」に言及したり、自分の状態「直せないんですけど」、相手の状態「時間ありますか」について話すことが、間接的な要求になったりするわけです。一方、断るほうは、発話者の目標とか状態とか自分の状態を否定すればいいわけです。「コピーする必要ないでしょう」と言えば、コピーをするという目標そのものが否定されるので、間接的な拒否になります。また、「コピー機ね、実は壊れてないんですよ」とか、「自分で直せるでしょう」と言われれば、はこの助手さんは「直しません」と言っているのかな、と解釈するわけです。あるいは助手さんが「私も直せないのよ」とか、「今時間がないの」、「会議があるのよ」、「あの助手さんなら直してくれるわよ」など言えば、これも発話者が前提としていることをかわすことになり、間接的な拒否表現になります。こんなことで、一見関係性がないように見える発話、会話がどうして可能なのか、ということをしばらくやっていました。名誉のために言うならば、私の周りの助手さんたちは今も昔も、皆さんたいへん支援的な方々です。



3. 助手時代: 学位論文と子育て

脊髄反射で対応する

そんなことをしていたら助手になったんですね。今度は自分がコピー機を直すのを依頼される側になってしまったわけです。ここで思ったのは、自分が今やろうと思っていることを邪魔してくるいろいろな要求、要請がある。実は壊れていないのに「コピー機壊れている」とか、紙はちゃんと横に置いてあるのに「コピー機の紙がない」とか、いろいろな要求があるわけです。最初は、対応するのは一々大変だな、と思ったりしていましたが、「脊髄反射で対応する」というモットーを思いつきまして、うまく対応できるようになりました。何かのめりこんでいるときに、突然、要請や依頼が来たとします。大脳皮質まで経由させると、「えー、今?」とか、「うーん大変」とか、「自分でできるんじゃないの」とかいろいろとってしまうので、そういう依頼が来たならば、即、ぴよんと跳ね上がり人形みたいに跳ね上がって、「はい、いいですよ」と返事をして、ささっと「意識」を通さずに対応し、できるだけ早く自分のやりたいことに戻る。こういうふうな考え方を切りかえたんですね。

この「脊髄反射で対応する」というのは、子育てしているときにも大変うまくいきました。何かやろうとしていると、子どもが、これやってとか、あれやってとか言ってくるわけです。そういうときに「えー、今これやっていたのに」と思ってこっちをやめて、子どものほうに行くというのは神経が青立つみたいなどころがあるわけです。そこで、子どもが何か言ってきたら脊髄反射で

対応する、と決めて、何も考えずに「はいわかったよ」と言ってささっとやって、また元に戻る。こんなふうにするだけで随分助けられたと思います。私にとっては、すごくいい方法でした。

さて、1984年に助手になったところに戻ります。私は29歳だったんですけど、その2年ぐらい前から子どもが欲しいなと思うようになっていました。そしたら、妊娠したんですね。妊娠がわかった年に助手の仕事がいただけそうになり、子育てしながら助手が務まるんだらうか、周囲に迷惑をかけるのではないかと、悩んだりもしました。が、結局は、周りにどう思われてもしょうがないと思って、勇気をもって助手なってみることにし、当時は育休とか産休もあまりなかったものですから、そこら辺を最小限にして、どうにか乗り切れるかな、と計画を立てました。というわけで、8月、9月産休をとって、10月に出産して、1月に復帰しました。

子どもが生まれたら、また、助手になったら、新しい研究はなかなかできないですよ。忙しいです。で、それまでの間接的言語行為、「はもん」の話、「だから」とか「だけど」の卒論まで使って学位論文を書きました。

研究者を目指される方は、学位論文は大きなハードルと思われるかもしれませんが、でも、学位論文は、後ろ向きの作業なんですよ。日々やっていて楽しいのは、データをとって分析し、個々の論文を書くところです。学位論文というのは、それを並べてみて、見直して、足りないところを補い、一つのストーリーにまとめていく、という作業かな、と思います。ですので、学位論文は後ろ向きの仕事。ほかに新しいデータがとれないときにやる仕事、というふうに思われたら、少し楽になるかなと思います。

というわけで、助手の3年間は、何も新しいことはできなかったんですが、この3年間に学位論文を書けばいいやと思うことにしました。それはそれで一つの成果になるわけですので、それまで書きためていた、書き散らしていた論文をまとめて「意味の多義性処理に関する認知心理学的研究」という形で学位論文を書きました。ですので、いいときもある、停滞してしまうときもあるんですが、停滞したときは後ろ向きの仕事をする、というのも一つかなと思います。

子育て時代の工夫

今から思うと、いろいろな工夫をしていたなと思います。

一つは職住接近です。ワークライフバランスの本にも書きましたが、超接近が重要で、引っ越しは6回か7回繰り返しました。とにかく近くに住む、自分の職場と保育所とが近いところがいいです。通勤は大変ですし、子どもが熱を出したとか、何かあったとなればすぐに駆けつけないといけないので、そこは脊髄反射で対応するわけですが、とにかく近いところというのは、大きなメリットだと思います。

それから、いろいろなことを兼ねるとのこと。例えば、ジムに行って汗流している人がいる。いいなと思うんだけど、それならば走ればいいじゃないかということで、職場に行くときに走って行くわけです。家でぎりぎりまで何かして、もう時間だ、となって走るときに、これはジムでやっていることだ、と思うようにする。英会話に通う人もいるわけです。英会話に週2回行っているとか一対一でやっているとか聞くと、ああ、いいな—と思うんですけど、例えば文献研究をやっているときに、あ、これは無料の英会話かと思えば、ここも気持ちが楽になる。ということで、いろいろなことを兼ねるみたいな、デュアルな形でやってまいりました。

優先順位はとても重要で、全部はできないわけです。100点はとれないというか、もうほとんど20点とか30点のレベルですので、何を大事にするかですね。私は食べ物が大事だと思っていたので、無農薬の玄米を買ってきてそれを食べさせるみたいなことをしたりしていました。子どもは黒御飯とかと言って嫌がっていましたが、あるときは一粒、一粒見ながら、お母さん、ここにあるお米は全部死んでいるのというふうに聞くので、死んでいるといえば死んでいるよね—、と答えたりしたこともあります。食べ物は重視していました。でも、衣服やお部屋の散らかりは我慢することにして、本当に散らかった状態で住んでいました。

お金で時間を買うというのがあります。助手になったのでお給料が18万ぐらいいったんですね。11万が家賃でなくなってしまうので、あと7万なんですけれども、出産まで、その7万を貯めていたんです。旦那も仕事をし始めたので、少し貯蓄ができたんですけども、産休があけて、子どもを保育所に預

けられるようになるまでの数ヶ月は、ベビーシッターさんをお願いしなくてはなりませんでした。当時でも、ベビーシッターさんは1日1万円ですね。でも、ベビーシッターさんも双子で1万円だからちょっと割安よと言われるし、そうかと思いながらも毎日1万円が飛んでいく、貯めていたお金はあつという間に底をつく、ということもありました。そこはもうしょうがないかな、と思います。

先に言いましたように、衣服については、こだわらないというのもモットーというか、モットーにせざるを得なかったです。例えば、洋服は、「上」と「下」から成り立つわけです。私も今、「上」（アンサンブル）と「下」（ズボン）となっているわけなんですけれども、上の服をこっちの箱、下の服をこっちの箱の中に入れておくと、子どもがやがて自分で上と下と選んで着ようになるんですよね。そうすると、お母さんが「今日はこれとこれの組み合わせがいいから、これを着ましようね」なんて言わなくても、上と下を、子どもたちが選んで着てくれる。組み合わせが変でも、それで一つ仕事がなくなるということがあるわけです。私自身も、「上」は、色違いのアンサンブルがいっぱいあって、「下」のズボンも茶色いのと黒いのがあって、いつもそれを組み合わせて着ています。そうすると、余り考えなくても普通の格好ができるかな、どうでしょうね。

これは、子どもが考えたことなんですけど、毎朝、保育所に行くわけなんですけれども、前の晩、保育所に行く服で寝る、というんですよね。「何で？」と聞くと、「だって朝、パジャマ脱いでまた服着ないといけないから今から着ておく」と言うんです。「確かにそうだよ」と思って、普通だとちょっとゴムが閉まってきついんじゃないの、とか言いたくなるころなんですけど、本人たちがいいと言うので、保育所に行く服装で寝るみたいなことをやっていました。今からいうと、緊急避難に備えているような感じですね。

究極のサバイバル御飯というのがあって、これは夫が考えたんですけど、食べるものがない、となったら、大きいボールに玄米をいっぱい入れるわけです。そこに卵をぼんぼんぼんぼんと割って、大きいスプーンでばっと混ぜるんですよね。ブルーシート敷いてみんなで車座に座って、そのボールから自分のスプーンで食べるという、まさにサバイバル体験しに行ったときのような生活

も時々はしていました。これもなかなか楽しいですし、人目を気にしなければ面白く、きょうもサバイバル御飯だと子どもたちはとても喜んでいてよかったかな、と思います。

4. 就職と在外研究

就職してから

1987年に助手の仕事が終わるので、どうしようかと思い、3カ所、4カ所アプライしたんですけど、だめだめでした。千葉大は、前の年にも出して、そのときはだめだったんですけど、次の年の公募に出したら、捨ててくださったんですね。面接に行くときに、眼鏡をかけていたほうが受けがいいか、外したほうが受けがいいか、眼鏡をとったり外したりしながら面接を待ち、結局、ちょっと真面目に見えるように、眼鏡をつけて受けたんですけど、つけていたら採ってくれたみたいなきこがありまして、就職しました。

そうになると、生活をしながら研究する、ということをやらないといけない。なかなか両方はできないということで、生活の中でデータをとる、ということを始めました。そんなことで、毎週木曜日、食事の時間の会話を記録するというのを数年間続け、それを分析して、「だから」「だけど」と同じような、目で見ることのでない言葉、「1枚」とか「2枚」とか「1本」とか「2本」とか、そういう数を数えるときの「枚、本」を助数詞というんですけども、助数詞の習得過程を研究することにしました。りんごだったら目に見える、お皿も目に見えるけれども、目に見えない助数詞をどうやって学ぶのかというのは、大変興味深いわけです。会話の中でどうやってこういった助数詞が習得されていくのかを調べたりしました。スライドにお示ししているのは自然場面のデータですが、このほか実験場面も作って、僅かな時間を切り盛りしながらデータをとったりしました。

また、学生さんがいますので、学生さんが持っている関心を一緒に共有させてもらって、「書いて覚える」ことの効果、書くって本当に効果があるのかね、という学習法の効果や、「中学校時代のキャンパスの記憶」、久々に出身中学に行ってみたら、キャンパスがいやに小さく感じたんだけれども、記憶の中でキャンパスの広さって変わったりするんでしょうか。そういった素朴な疑問

1987千葉大に就職した・1990在外に出た

- 生活の中でデータをとる！
- 学生との共同研究
 - » 書いて覚える
 - » キャンパスの記憶
- 在外研究に行った
 - » やらないで後悔するよりも、やってみたほうがよいよね～
 - » そりゃそうだよ
- 怖くなかった、世界が広がった



月	0	1	1	2	2	3	3	5	6	7	7	7	8	8	8	9	9	10	10	11	
週	4	1	3	4	3	5	3	4	1	4	1	2	4	1	3	4	2	3	2	4	4
回	母																				
子																					
個	母																				
子																					
つ	母																				
子																					

勇気！

助数詞の獲得
Naka, 2001

を、学生と共有しながら、新しい研究を始めました。

そして、90年ですね。若手在外研究という制度があって、それは35歳までの研究者を世界に送り出すという制度なんですけれども、私はまだ勤務して2年目ぐらいだったんですが、アプライしてしまったんですよね。周りの先生からは、えー、仲さん今行くの、就職したばかりなのに、という意見もあったんですが、今年アプライしないとこれが最後なんですと言って、ここも周囲から見れば自分勝手だということになってしまうんですけども、自分の中では勇気を出して、アメリカはノースキャロライナ州、デューク大学に出させていただきます。今もほんとうに感謝しています。

夫は仕事で忙しく、私は2人を連れて行くわけなんですけど、当時5歳だったかな、本当に行けるかなと思ったんですよね。高校時代に滞在していたときはホームステイでしたし、守られていたという感じがあるんですよね。ひとりでは怖くないとか、全部ひとりでできるのかとか、いろいろ考えて迷うところもあったんです。でも、実家から自宅に戻る途中だったか、車のなかで父に「やらないで後悔するよりも、やってみたというほうがいいよね」と、内容も言わずに言ってみましたら、父が「うん、そりゃそうだよ」と、何の話かもわからないまま言ったわけなんですよね。なので「そうだよね」と思っ行ってみた

ら怖くなくなったし、本当に世界が広がるという体験ができて、大変よかったので、もし皆様方もチャンスがあったならば、ぜひいらしていただきたいです。

日常記憶研究

そこで広がったのは日常生活のなかでの記憶に関する研究です。

一つは、「書いて覚える」の研究。もともと千葉大の学生さんが「書くと感じられるものですかね」とか言って、少し一緒に研究を始めていたんですね。渡米してみたら、さらにおもしろいことがわかりました。日本の子どもたちは、これは1年生の子どもが書いたものですが、こうやって書きながら覚える。ところが、アメリカの小学校では——子どもはアメリカの小学校に入ったわけなんです——、例えばきょうは「Rの日」とかかって、こういったいろいろな文字が書いてある中で、Rを探すとか、新聞や雑誌などからAとかBとかCに当たる文字を切り出してきて張りつけるというような方法で学習している。書いて覚える場合、心理学では「再生」と言うんですけど、白紙に書き出しながら覚える。こっちは既にあるものについて丸をつけたりして、これは「再認」というんですが、そうやって覚えている。覚え方が違うと思って、この違いについて調べてみました。

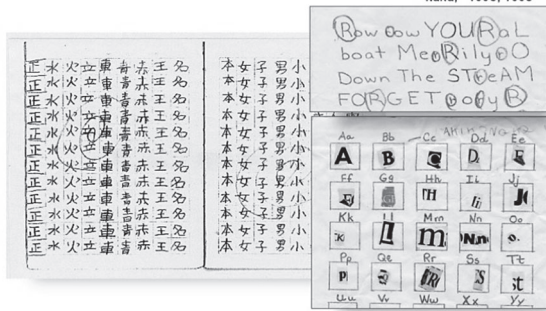
実際書いて覚えるって、どんな効果があるんだろうとかかいうようなことでいろいろな材料を使って研究を行ったんですよ。例えば、ひらがなや漢字の言葉、あるいはスセのような無意味つづりであるとか、漢字っぽい、ハンゲルっぽい、いろいろな文字風の図形をつくって、書いて覚えるか、見て——見るだけでは、本当に見ているかどうかわかりませんので、丸をつけてもらうんですが——覚えるかしてもらう。その後、今覚えてばかりの記憶を思い出してもらって全部100点になってしまいますので、少し計算課題などをしてもらって、その後、書いて思い出すか見て思い出すかしてもらう、というようなことをしました。

こういう研究からわかったことは、結局のところ、漢字風、ハンゲル風、ローマ字風の無意味図形や、私たちが普通接することのないアラビア文字とか、要するに図形とかロゴとか、そういうものは書いて覚えると大変効果がある。でも、予想に反して、漢字の語彙とか、英単語とか、こういうものは書いて

でも、見ても書いても、差はなかったんですよ。図形のときだけ書いて覚えるほうが見て覚えるよりも2倍ぐらいよくて、これは大きな効果なんです、ほかのものは書いて覚えても、見て覚えても余り差がない。そのずっと後、また別の学生さんが関心を持って、生物学で用いられる植物の長い名前などは書いて覚えるほうがいいんじゃないですか、とって検討してみたんですが、やっぱり効果は出ませんでした。発音できるものや、知っている文字の並びというのは、見て発音したり、意味づけたりして覚えるほうが成績がいい、という結果が一貫して得られていて、これもおもしろいところです。

生活の中での研究：書くと覚えられるか

Naka, 1995, 1998



その後広がったのが、キャンパスの記憶の調査です。もうここは飛ばしますがけれども、かつて自分が通った中学校のキャンパスの記憶がどういうふうに変化していくかというのを調べたりしました。キャンパスを絵に描いてもらおうと、おもしろいことに、中学生のときに屋内系の部活だった人は、校舎を手前に描く。でも、野球部とかサッカー部とか、長い時間外にいた人たちは校庭を手前に描く。こんな認知地図の違いを調べたり、千葉大には附属中学校があって、長い歴史のある中学校でしたので、24年間前からの卒業生にアンケートを送り、キャンパスの記憶を思い出していただいて、記憶がどんなふうに変化していくかを、調べるということもしました。こういった研究は、自伝的記憶という、自分の歴史に関する記憶の研究につながっていきました。

学習材料

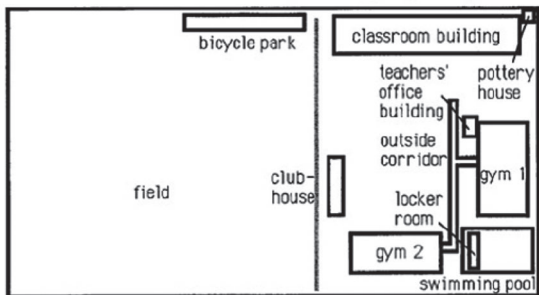
学習材料	例
漢字	目標 価格
単語	うた あみ
無意味つづり	スセ クケ
英単語	way red
発音可能な英無意味つづり	jid rul
発音困難な英無意味つづり	vft ndx
ハングル文字風の無意味図形	ㅍㅍ □
漢字風の無意味図形	↑∧ □
ローマ字風の無意味図形	m ← n →
アラビア文字	ص نس
アラビア文字の読み方	サーダ シーン

中学校キャンパスの記憶と自伝的記憶

Naka & Minami, 1990; Naka, 1995

$$y = kx^n \quad n < 1$$

N 門・校舎 ↓



S

5. ホワイト研究とダーク研究

目撃証言研究との出会い

ここでまた一つ、勇気のいることだったんですけど、アメリカから帰国しましたら、目撃証言の研究に誘われました。しかも、その目撃証言というのが、放火事件なんですよ。1984年に店員さんがあるお客さんに電磁弁という爆弾の材料となるものを売った。そして84年9月に政党本部が炎上した。

その4ヶ月後、この店員さんが写真帳の中から1人の人物をピックアップした。この方が被疑者となり、裁判が行われ、1審では証拠不十分ということで無罪になったんですけれども、2審が始まりました。店員さんによる4カ月後の識別に信用性はあるのかということで、弁護士さんから鑑定の依頼を受けました。今までやってきた研究がホワイト研究だとすると、このあたり、ダーク研究といいますか、研究者としては何か恐る恐る知らない世界に入っていくというふうな感じなんですけど、やっぱり虎穴に入らずんば虎子を得ずというところもあるわけです。裁判となりますと、当事者同士、こういう主張をしている人とああいう主張をしている人がいて、その対決の中でこの証拠をどう見るか、科学的に見たらどうか、ということを検討するわけですし、真剣勝負になるわけですね。このあたりでも、やっぱりおもしろさには負けてしまい、のめりこんでいきました。

店員さんが初めて見るお客に物を売ったとして、その後、どれくらい顔を覚えていられるかというのは、文献検索をしてみても、ほとんど研究がないんですよね。そんな研究、普通しないでしょうというのがあつたわけです。そこで共同研究者と一緒に、シミュレーション実験なるものを行いました。ある人がサクラとなって、125件の問屋さんでいろいろな買い物をする。目立つように手に包帯を巻いてもらったりして、お店に入ってもらい、買い物をして出てくるというふうなことをやり、その3カ月後に——事件ですと4カ月後なんですけど、もう少し厳しい条件を設けて3カ月後に——店員さんがこの客のことをどれくらい再認できるかを調べました。

その結果、顔を当てることができた定員さんは、わずか9%でしたが、その9%というのは大変特殊な人たちでした。例えば、この客は筋がよくて、将来的には大量の取引ができるんじゃないかと思って、名刺を壁に張って——偽の名刺を配ったりしていたんですけど——、何回か電話してみたんですけど、つながらなくておかしいと思っていましたといった、そういうような人であるとか。あるいは、普通、問屋さんというのは、素人の人は買い物ができないわけですよね、業者の方たちだけが買い物に来るところですからね。ですから、例えばボタンの問屋さんでは、サクラの男性が「僕は家庭科の教師です、子どもたちにボタンつけをさせたいんですけれども、みんなの動機づけが上がるよ

うなおもしろいボタンを買っていったらいいかなと思っているんです」というストーリーを、つけ焼き刃でつくって話したりしているわけなんですよ。これは例ですが、こういったディープな話を聞いた店員さんの中には、当てることができた人もいます。でも、91%、つまりほとんどの店員さんたちは、当てることができないか、そもそもそういう出来事があったことすら覚えていないというふうなことでした。これをもって、私たちは法廷で専門家証言をしまして、これが私の目撃証言研究の最初になった、ということがあります。

6. 子どもの供述と司法面接

子どもの供述の問題点

その後、こういった研究を幾つもしてきたんですが、ある方からこんな事件の検討を依頼されました。「強盗致傷被告事件において、目撃者とされる四歳児の供述能力を肯定したが、その供述の信用性を否定した事例」として『ジュリスト』に紹介されていますけれども、子どもさんの供述が問題になった事案なんですよ。もとはといえば、「だから」や「だけど」、助数詞の研究など、子どもと大人の対話の研究もしてまして、子どもというのはずっと研究の一つのテーマであったので、あ、こういうところで子どもさんが証言することがあるんだというふうに思ったわけなんです。

この事件があったときに、テレビ局の方が来られまして、子どもの記憶ってどうなんですかと言われた。子どもの記憶に関してはいろいろ言えることがあるのでお話をして、Bruck たちの実験の話もしたんですよ。その実験というのは、幼児に、実際にあった体験と実際にはなかった体験を聞いてみる。子どもたちは実際に体験したことは話すことができますが、実際になかった体験も、いろいろと聞いてみると話をし始め、だんだんそれが本当のように思えてきてしまう、とうことがあります。こういった傾向性を被暗示性というんですけれども、この話をテレビ局の方にして、子どもから話を聞くときは注意が必要ですよ、というようなことを言いました。そしたら、彼らが幼稚園等の協力を得て行った実験の動画を持ってきてくれたんですよ。この動画、いつもご紹介しているので、ここでもご紹介したいと思います。

(動画上映)

見ていただいたように、子どもたちは、本当に行ったジャガイモ掘りの話はお話しできるんだけれども、実際には行っていないサクランボ狩りのほうも、木になっていたとか、おじいちゃん、おばあちゃんにあげたとか、そんなことを言い始める、そういう実験です。こんなことを示して、子どもさんの記憶というのは曖昧なので、聴取するときには注意が必要です、などと言ってきました。

司法面接

今お話した事案に出会ったのは1997年ですけれども、そのときはどうすればいいか、というのがわからなかったんですね。何件もこういった相談が来るようになってきて、そのたびに「ここは誘導になっていますね」とか、「ここは子どもが答えていないのに、大人のほうがしゃべっていますね」、そんなことを何件もやって、意見書を書いたり、鑑定書を書いたり、法廷で証言するというのもしてきました。でも、これじゃ子どもさんの言っていることはなかなか、仮に本当に事件に遭遇したとしても、聴き取りの方法がよくないために、声が伝わらないんじゃないか、と思うようになりまして、結構悩んでいたんですね。そうしましたら、1999年でしたか、イギリスの学会に行く途中、ポーツマス大学の犯罪心理学研究所で、司法面接のガイドラインに出会ったわけなんです。司法面接というのは、誘導や暗示を避けて、本人からできるだけ正確に話をしてもらう、しかも、嫌な体験を話すというのは辛いことなんですけれども、そういう負担を最小限にするために面接を繰り返さない、そういう聴取法です。こういう方法が何とか日本でも使えないかなと思い、時間は随分かかったんですけども、2004年に一つ本を翻訳して、2006年にも別の本を翻訳して、というふうなことをしました。

その頃、ちょうど放送大学の授業を依頼されました。編集会議で、「どこか取材に行きたい所はありませんか」という話になったときに、「行きたいです」と手を挙げ、せっかくですから英国での司法面接やそのトレーニングの様子も授業で取り上げたい、と言いましたら、ディレクターの方たちが賛成してくださって、普通、なかなか英国の警察での面接やトレーニングを見ることなどできなかったと思うんですが、取材させてもらうことができました。これを皮切

りに、英国の警察でトレーニングを受ける機会なども得て、また、その後は、科学技術振興機構（JST）、文部科学省科研費の新学術領域研究、さらにまた2015年のJSTの研究助成などをいただくことができて、英米での司法面接の実践を見せていただいたり、資料収集や、トレーニングに参加して私自身スキルを学ばせていただくこともあって、自分でも司法面接のトレーニングをするようになりました。

ところで、夫と子どもはどうなったか、もう全然話が出てこなくなってしまうんですけども、99年、子どもが犬と一緒にニュージーランドに行き、私はそのときに都立大に移り、2002年だったですかね、夫が九州の大学に移り、2003年には、住むところはみんなばらばらでも家族だと思って、私も北大に移り、というふうにして、スカイプ家族みたいな形になって今に至る感じなんですね。今、子どもは一人は仕事、一人は家庭に入り関東で暮らしています、夫は九州、私は北海道だったんですけど、北海道よりは少し九州に近くなって、今は新幹線に乗れば福岡に行けますので、そんな感じで週末に行ったりすることもあるんですが、そんな形でやっています。

司法面接の手続きと研修

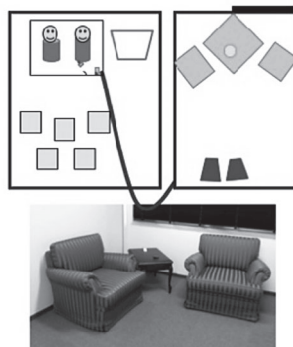
さて、司法面接ってどんな面接法かといいますと、まず導入においては、挨拶や、ラポール形成、つまり話しやすい関係性を築く会話を行ったりして、さらに本人に話してもらうことを自由報告というんですけども、その練習もします。その後、本題に入りますが、面接者が「たたかれましたか」「さわられましたか」「パパにやられたのね」なんて聞いてしまうと、これはみな誘導になってしまいますから、できるだけ質問を控えて、本人に話してもらいます。これを自由報告といいます。司法面接は、自由報告を得ることを主体とし、足りないところは質問で補うという面接法なんですね。最後は「お疲れさま」だけではなくて、「話してくれてどうもありがとう」「何か質問はないですか」などのクロージングの手続きを行っておしまいにします。スライドにURLがありますが、ここから司法面接の手続きをダウンロードすることもできますので、よかったらご参照ください。（<http://forensic-interviews.jp/>）

司法面接は、2つの部屋を使って行います。面接室では面接者が被面接者と

話をし、モニター室では——子どもが児童相談所、病院、警察、検事さんのところだと、何度も話さなければならない、嫌な体験を繰り返し話さなければならない、ということを防ぐために——多職種連携のチームが面接を視聴し、モニターし、支援します。面接者は面接の途中で、あと何と何を聞けばいいですか、などと相談に来ますが、これをチームで支援します。これが司法面接なんですね。立命館大学でも2つお部屋をお借りして、面接室とモニター室をつくっています。

司法面接：負担をかけず正確な情報収集を

- 導入・ラポール形成
- 自由報告
- 質問
 - オープン質問
 - WH質問
 - クローズド質問
 - 確認質問
- クロージング



<http://forensic-interviews.jp/>

司法面接に関する本もたくさん出版しましたが、本を読むばかりでは、必ずしも面接ができるようにはなりません。ですので、自分自身、研修を開始しました。これは立命館での研修の写真で、8月と9月に3日ずつの研修を行ったんですけれども、児童相談所の職員、警察官、検事さん、弁護士さん、あとは医療関係者や事故対策の専門家などが見えることもあります。そういった方たちにこの面接法のトレーニングをしています。講義、グループワーク、ロールプレイなんかをしながら進めていきます。これを今まで、10年ぐらい続けてきて、受講された方も5,000人を超えました。特に警察や検察庁で取り調べが録音録画されるようになってからは、受講に来られる方も増えまして、使っ

提言とガイドライン



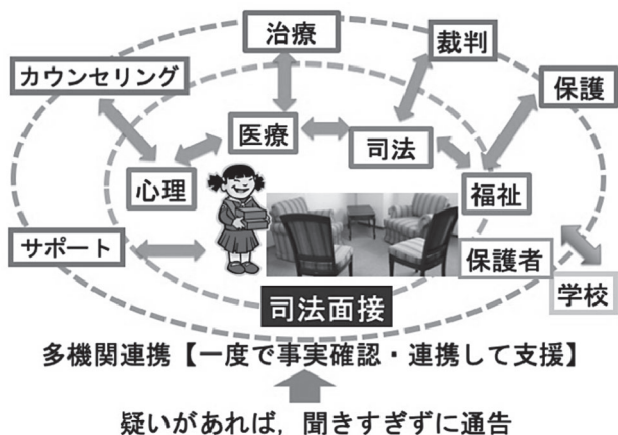
ていただいているということがあります。

そのようなわけで、現在、最大限、力を入れているのは司法面接の研究です。福祉と司法と医療と心理。医療と心理はまだ入ってきていないのでこれからなんですが、こういう多専門、多職種が連携して、事実確認に関しては、1回で面接を行って、その成果をいろいろな方法で、方向で、使っていこう、ということがあります。その一つ前の前提としては、幼稚園でも小学校でも、家庭でも施設でも、虐待や事件の疑いがあつたならば、根掘り葉掘り聞いたり、誘導的に聞いたりすることなく、こういった司法面接につなげていただくということが、大変重要です。

面接法と研修プログラムの開発・実装

- 一般研修
 - » 司法面接の概要
 - » NIChDプロトコル
 - » 補助証拠
 - » 難しい質問
 - » 話さない子どもとサポート
- 自由報告の練習
- DVDをみての練習
- 面接の計画
- ロールプレイ
- バックスタッフ演習





7. デュアルな世界

ワーク・ライフ・バランス

そういうことで、ワーク・ライフもそうですけど、ワークの中でもホワイト研究と、ブラック、とまでは言わないけれど、ダーク研究という、複数の世界でやってきた、ということがあります。このデュアルな生活、研究は、精神衛生上とてもよくて、仕事で落ち込む、ああ、もうだめだと思っても、家庭があるじゃないかと思って家庭に向かう。家庭で、ああ、私は何てだめな母親だろうかと思っても、まあ仕事もあるし、と思ってちょこっと逃げる。こんなことをしながら2つの世界を生きるというのはおもしろいし、楽、ということもあるわけです。

このデータは、今日来る前に見ていたものですが、男性、女性の生活時間を見ますと、例えば男性は出社が7時40分、帰宅が20時5分。残業は平均92分で、家事時間が15分、育児時間が26分。ここだけをアメリカのデータと比べてみますと、アメリカの男性は家事が53分、育児が84分ということなんです。日本の男性より家事、育児が多いですね。女性のほうは、仕事をしている人なんです、8時55分に出社、帰るのが17時53分、18時ぐらいが平均となっています。家事時間は94分、育児時間は55分。アメリカの女性も家事時間は98分で同じくらい、育児は108分で日本の2倍ですけども、こんな

ふうな形になっています。これを見てどう思われますか。男性は家事を15分しかしていないし、育児は26分、それなのに女性は家事を94分もやらなくちゃいけないくて、育児も2倍の時間で、何か辛いな、大変だな、と思われるのでしょうか。でも、別の見方をすれば、女性は仕事だけではない、育児・子育てという別の世界を持っている。これだけのデータでいえば、女性は大変ある意味幸せかな、と思えるところもあるわけです。

たまたまなのですが、11月14日に東京の法務省の前を歩いていましたら、「霞が関過労死110番」という活動をしておられる人たちがチラシを配っていました。何気なくいただいたら、問題があったらここに連絡してください。一人で悩まず相談してくださいというチラシなんです。そこに、ちょっと胸が痛む、生の声でしょうか、書いてあるんですよ。「国会業務や不測の事態への対応が重なり、木曜日の朝から土曜日の朝まで48時間寝ないで仕事をしている中、そのまま続けて勤務するように当然のように命じられた」とか、「1年間のうち半分は職場に泊まり込むか朝帰りだ。霞が関不夜城とはよく言ったもので、こんなところで働いていると過労死するか家族を失うかの2つぐらいしか道がないように思う」、「午前5時まで職場で働いていたりすると、どうしてこんなに働かなくちゃいけないのか、ばからしくなって、ぱっと職場の窓から飛び降りたほうが楽になるんじゃないかと思うことがある」。これらは省庁で仕事されている国家公務員の方々の声なのかな、と思います。外から見ると、国家公務員ってすごいねって思うんですが、こうやって働いている方たちがいるのかと思うと、家事時間もない、子どもと遊ぶ時間もないというのは本当に苦しいことだろうと思うわけです。

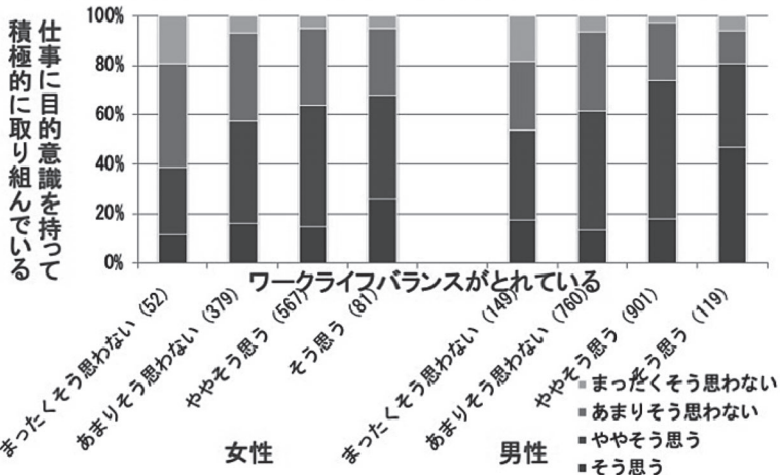
これは厚生労働省のデータからとってきたものです。左側は女性のデータ。「ワーク・ライフ・バランスがとれている」と全く思わない人、余りそう思わない人、ややそう思う人、そう思う人。縦軸は、「仕事に目的意識を持って積極的に取り組んでいる」への回答を示しています。これを見ますと、「仕事に目的意識を持って積極的に取り組んでいる」についてそう思う、ややそう思うという人たちの割合は、「ワーク・ライフ・バランスとれている」についてそう思う、ややそう思う人たちにおいて多い。男性も同様です。この調査でのワーク・ライフ・バランスがとれているかどうかというのは、本人の意識で

あって、勤務時間、育児時間が測定されているわけではありません。ですから、具体的な時間によらず、両方を、まあバランスよくやっているなど感じている人は、仕事に対しても目的意識を持ってやっている、ということが言えるのかなと思います。そうしますと、ワーク・ワーク・ワークというのは、かつては私も「いいなー」と思うこともあったんですが、やはりいいことではない。引き離されるようにでも、あるいは脊髄反射で働かなくちゃいけないとき

生活時間（男性，女性）

- 出社7:41, 始業8:52, 終業18:44, 退社19:08, 帰宅20:05, 残業92.3分, 家での仕事5.9分
 - 家事15.4, 育児26.1 (米53.1, 84.7)
 - 出社: 8:55, 始業9:44, 終業16:55, 退社17:08, 帰宅17:53, 残業22.8分, 家での仕事25分
 - 家事94.5, 育児55.8 (米98.7, 108.1)
- <http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/data/book/2016/documents/Databook2016.pdf>

ワーク・ライフ・バランス実現度と仕事への意欲（内閣府，2006） <http://www.gender.go.jp/kai gi/senmon/syosika/pdf/g-work.pdf>



でも、やっぱり2つの世界があって、こっちにもあっちにも行けるというのはとっても重要なことだと思います。これがあると人生楽しくなるかな、と思います。

最後に

そういうわけで、最後の言葉は、2つの世界、デュアルな世界というのはいいものですよ、ということです。これを大切にしていただければと思いますし、私もそうしたいと思っています。

あとは、時々、勇気を出さないといけないところがあるわけですが、あまり「そんたく」しないで、ジャンプ・インしてみられたら、と思います。多少身勝手だと思われても、後になったらきっとだいじょうぶですので、勇気を持たれたらいいかなと思うし、私自身もそうするかな、と思います。

何より楽しいことを追求していく、というのも重要です。嫌なことを耐える、というのは精神衛生上よくないですから、嫌だったら、ちょっとあっちの世界に行ってみればいいわけですね。長い人生ですから、楽しいことを追求しましょう。

もう一つ、ここではしなかった話ですが、何事も説明しなくちゃ伝わらない、ということがありまして、夫とのけんかとか、子どもが言うことを聞かないとか、仕事関係で人とうまくいかないとか、そういうことがあったときは、わかってくれるだろうとか、何でわかってくれないんだろうというのでは、なかなか伝わりませんので、そういうときにはちゃんと説明する、みたいなのが必要な場面もあるかな、と思います。

ということで、これでお話をおしまいさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

○松原 仲先生、ありがとうございました。

○仲 どうもありがとうございました。早口ですみません。

○松原 本当に豊富なエピソードに満ちたお話だったと思います。

ここでお2人ぐらいいもしありましたら質問を受けたいんですけども、ご専門にかかわることもあるし、それから生活の面ですね。子育てとか、あるいは海外に行くとか、そういったいろいろなお話がありました。どんなことでも結構ですので、何かありましたら挙手していただければ結構ですが、いかがでしょうか。

はい、どうぞ。そちらの方。今マイク参ります。

○質問者 お話ありがとうございます。大阪府立大学で女性研究者支援事業のコーディネーターをしている者なんですけれども、先生のご経験も踏まえたお話ですごくおもしろく聞かせていただきました。ありがとうございます。

女性の先生方からいろいろな相談を受ける場面も私あるんですけども、その中で、よく仕事や研究を続けていく上で、やっぱり子育てとのバランスというのにすごく悩まれている先生が多くて、特にやっぱり研究者カップルですと、先生も言われていましたスカイプ家族というか、別居婚の方も多くて、そういった場合にやっぱり子どもへの、自分が仕事や研究に傾き過ぎると子どもへの影響があるんじゃないかということをしごく心配される方がいるんですけども、先生のご経験から、別居婚、子どもも含めて別居で暮らされている中で、お子さんに意外と大丈夫だったとか、何かそういったお話があれば、そんな心配なくて大丈夫だよみたいなエピソードがもしありましたら、ぜひ聞かせていただきたいなと思います。

○仲 ありがとうございます。このあたりは認識の問題かな、とも思います。「ワーク・ライフ・バランス」にも書いていますけれども、例えば、専業主婦の方と、仕事を持っている方——仕事と家庭という2つの世界を持っておられる方——とを比較しますと、後者の方のほうが精神的な健康度が高い、という報告があったりします。子育てをする親の精神的健康度、安心感、抑うつでない状態というのは子育てにも影響しますから、仕事を持っていること自体が子育てに悪い影響を及ぼすとか、子どもとつき合う時間が短いから悪い影響を及ぼす、ということは余り考えなくてもいいのではないかな、と思います。よくないのは、「私が仕事しているからこうなっちゃった」とか、「目をかけてあげ

ないといけないのに、できていないからうちの子はこうなんだ」、というふう
に思われることだ、と思います。子どもは子どもで育つ力を持っていますの
で、そこを支援するという形で、親も最適な状態で支援していつてあげられ
る、というのがいいと思います。ですから、例えば子どもがいじめに遭ったと
か、病気になったとか、事故に遭ったとかいうときに、これを「共働きだから
いけないよね」とか、「両方研究者だからね」というようには見ない、という
ことを、本人も周りも、それぞれが思わなくてはいけないことだと思うし、ほ
かの人たちの子育てについても、そういう見方をしない、というのがいいと思
います。あまりお答えにはなっていないかもしれませんが、育児時間が短い、
イコール、悪い子育て、ということはないと思うんですね。

○質問者 ありがとうございます。

○仲 ありがとうございます。

○松原 ありがとうございます。

また午後のシンポジウムでも仲先生にもご登壇いただきますので、また何か
ありましたら、シンポジウムの最後でもフロアからの皆さんの質問等を受け付
けますので、そのときをお願いします。

では、仲先生、本当におもしろい話ありがとうございました。また拍手をお
願いいたします。(拍手)

では、続きまして、立命館大学のリサーチライフサポート室の室長である田
中弘美先生からお話をいただきます。よろしく願いいたします。